

# 巴里のむす子へ

岡本かの子

青空文庫



巴里の北の停車場でおまえと訣<sup>わか</sup>れてから、もう六年目になる。  
 人は久しい歲月という。だが、私には永いのだか短いのだか判<sup>わか</sup>ら  
 ない。あまりに日夜<sup>にちや</sup>思い続ける私とおまえとの間には最早<sup>もは</sup>や直通  
 の心の橋が出来<sup>でき</sup>ていて、歲月も距離も殆<sup>ほとん</sup>ど影響しないように感ぜ  
 られる。私たち二人は望みの時、その橋の上で出会うことが出来  
 る。おまえはいつでも二十<sup>はたち</sup>の青年のむす子で、私はいつでも稚<sup>ちじゆ</sup>  
 純<sup>ん</sup>な母。「だらしがないな、羽織<sup>はおり</sup>の襟<sup>えり</sup>が曲<sup>まが</sup>つてるよ、おかあさ  
 ん、」「生意氣<sup>えいごう</sup>いうよ、こどもの癖<sup>くせ</sup>に、」二人は微笑<sup>びしょう</sup>して眺め  
 合う。永劫<sup>えいごう</sup>の時間と空間は、その橋の下風の<sup>かす</sup>ように幽かに音  
 を立てて吹き過ぎる。

二人の想いは宗教の神秘性にまで昂められている。恐らく生を更え死を更えても変わるまい。だが、ふとしたことから、私は現実のおまえに気付かせられることがある。すると無暗に現実のおまえに会い度くなる。巴里が東京でないのが腹立たしくなる。

それはどういふときだというと、おまえに肖た青年の後姿を見たとき、おまえの家へ残して行つた稽古用品や着古した着物が取出されるとき。それから、思いがけなく、まるで違つたものからでもおまえを連想させられる。ぼんの窪のちぢりつ毛や、のぶと率直な声音、——これ等も打撃だ。こういうとき、私は強い衝動に駆られて、若し許さるるなら私は大声挙げて「タロー！ タロー！」と野でも山でも叫び廻り度い気がする。それが出

来ないばかりに、私は涙ぐんで蹲うずくまりながらおまえの歌を詠よむ。おまえがときどき「あんまり断片的の感想で、さっぱり判りませんね。もつと冷静に書いて寄越よこして下さい」と苦にがり切った手紙を寄越さなければならぬほどの感情にあふれた走り書を私が郵送するのも多くそういうときである。だが、おまえが何といおうとも、私はこれからもおまえにああいう手紙を書き送る。何故なぜならば、それを止やめることは私にとって生理的にも悪い。

おまえは、健康で、着ちやくちやく々々、画業がぎようを進しんちよく捗とくしていること

は、そつちからの新聞雑誌で見るばかりでなく、この間来たクルト・セリグマン氏の口からも、または横光利一りいちさんの旅行文、読売の巴里特派員松尾邦之助くにのすけ氏の日本の美術雑誌通信でも親したしく

見聞きして嬉しい。健気なむす子よと言ひ送り度い。年少で親を離れ異国の都で、よくも路を尋ね、向きを探つて正しくも辿り行くものである。辛いこともあつたろう。辱しめも忍ばねばならなかつたろう。一たい、おまえは私に似て情熱家肌の純情屋さんなのに、よくも、そこを矯め堪えて、現実に生きる歩調に性情を鍛え直そうとした。

「おかあさん、感情家だけではいけませんよ。生きるという事実の上に根を置いて、冷酷なほどに思索の歩みを進めて下さい。」

お前は最近の手紙にこう書いた。私はおまえのいうことを素直に受容れる。だが、この言葉はまた、おまえ自身、頑な現実の壁に行き当つて、さまざまに苦しみ抜いた果ての体験から来る自戒

の言葉ではあるまいか。とすれば、おまえの血と汗の籠こもった言葉だ。言葉は普通でも内容には沸ふつ々と熱いものが沸わいている。戒いましめとして永く大事にこの言葉の意味の自戒じかいを保もち合あって行こう。

私たちがおまえを巴里へ残して来たことは、おまえの父の青年画学生時代の理想を子のおまえに依よって実現じさすことであり、また、巴里は絵画の本場の道場だからである。しかし、無理をして勉強せよとも、是非ぜひ偉ひえくなれとも私たちは決して言わなかった。ただ分ぶん相応そうおうにその道に精しょう進しんすべきは人間の職しやく分ぶんとして当然のことであるとだけは言った。だのに、おまえはその本場の巴里で新画壇の世界的な作家達と並んで今や一ひとかどのことをやり出した。勿もつ体たいない、私のような者の子によくもそんな男の子が

……と言えは「あなたの肉体ではない、あなたの徹した母性愛が生んだのです」と人々もお前も、なおなお勿体ないことを言つて呉れる。

私たちの一家は、親子三人芸術に関係している。都合のいいこともあれば都合の悪いこともある。しかし今更いまさらこのことを喜憂きゆうしても始まらない。本能的なものが運命をそう招いたと思うより仕方しかたがない。だが、すでにこの道に入つた以上、左顧右眄さこうべんすべきではない。殉じゆんずることこそ、発見の手段である。親も子もやるどころまでやりましょう。芸術の道は、入るほど深く、また、ますます難かしい。だが殉ずるところに刻々こつこくの発見がある。本格の芸術の使命は実に「生」を学び、「人間」を開顕かいけんして、新しき



「いのち」を創造するところに在る。斯るときに於てはじめて芸術は人類に必需で、自他共に恵沢を与えられる仁術となる。一時の人氣や枝葉の美に戸惑つてはいけない。いつそやるなら、ここまで踏み入ることです。おまえは、うちの家族のことを芸術の挺身隊と言つたが、今こそ首肯する。

私は、巴里から歸つて来ておまえのことを話して呉れる人毎に必ず訊く、

「タローは、少しは大きくなりましたか。」  
すると、みんな答えて呉れる。

「どうして、立派な一人前の方です。」  
ほんとうにそうか、ほんとうにそうなのか。

私が訊いたのは何も背丈せたけのことばかりではない。西洋人に伍ごして角かくちく逐出来る体力や気魄きはくに就ついて探りを入れたのである。

「むすこは巴里の花形画家で、おやじや野原のへば絵描えかき……」

こんな鼻唄はなうたをうたいながら、お父様はこの頃、何を思ったか

おまえの美術学校時代の壊こわれた絵の具箱を肩に担かついでときどき晴れた野原へ写生に出かける。黙ってはいられるが、おまえの懐なつかしさに堪たえられないからであろう。

# 青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十三卷」冬樹社

1976（昭和51）年11月30日初版第1刷発行

初出：「新女苑」

1937（昭和12）年4月号

※表題は底本では、「巴里《パリ》のむす子へ」となっています。

※「ちぢりっ毛」の表記について、底本は、原文を尊重したとして  
います。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 巴里のむす子へ

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>